

2024年12月15日 青戸教会「風にそよぐ葦」

高橋克樹牧師

聖書 士師記13章2〜14節、マタイ福音書11章2〜19節

マタイ福音書11章2節以下では、洗礼者ヨハネが獄中から、イエスのなされている奇跡の業について、自分の弟子をイエスのもとに遣わして、「来るべき方としての救い主はあなたですか。それとも、他の救い主が来られるまで待ったほうがよいのでしょうか」と問い合わせたことが記されています。

洗礼者ヨハネとイエスの関係は、ヨハネが荒れ野で悔い改めを人々に勧めた際に、イエスが自ら進んで悔い改めの洗礼をヨハネから受けたという歴史上の事実が背景にあります。つまり、イエスは一時期洗礼者ヨハネの弟子であったのです。けれども、洗礼者ヨハネが悔い改めの洗礼を人々に授けていたのに対して、イエスは個人の悔い改めが必要であることを認めつつも、人間の側で神に対して己が正しくあるために悔い改めることによって、神との関係性が修復されるというヨハネの立場は、律法学者やファリサイ派の人々が律法を厳守することによって神の憐れみを受けるにふさわしい存在になることができるという考え方と本質的に同じだということに気づかれたのだと思うのです。

先の質問に対して、イエスはヨハネの弟子たちに対して4節以下で「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにまずかない人は幸いである」と答えています。イエスが見聞きしていることをそのままヨハネに伝えなさいと言っている内容は、イエスが奇跡的な能力を發揮している超能力者であるということではなくて、神が困難な事柄に直面している人間に対して憐れみの業をなしていることを伝えなさいという意味で、言っているのです。イエスの奇跡的な業の数々は、神が困難な状況にある人間に本来の人間的な状況を回復させようとする神の憐れみと慈しみの思いがこの世において実現している結果なのです。

それにもかかわらず、マタイ福音書でのヨハネの質問は、イエスが来るべき救い主であるかどうかという質問であって、ヨハネの質問の大前提になっていることは、神が人間の罪ある姿に左右されて、善い業に対しては善き結果をもたらし、悪い業に対しては悪い結果をもたらすような神であって、詰まるところ人間の業に対して因果応報的に報いる神であるということが前提にされているのです。

ですから、イエスが奇跡的な業の数々をしていることから、ヨハネはイエスが旧約聖書の預言書で預言されている「来るべき方Ⅱ救い主」であるかもしれないと考えたので、弟子を遣わしてイエス本人に問いたのです。ヨハネが無意識にも前提にしていることは、奇跡的な業をなすのがメシアだという先入観です。けれども、イエスはあくまでも、神の御心が奇跡的な業に現わされていることを前提にしているのです。ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められます。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か」と

問うています。群衆の中にも洗礼者ヨハネから悔い改めの洗礼を受けた者もいたのでしょうか。荒野でヨハネから悔い改めの洗礼を受けたことで、何が明らかになったのか、ということをやイエスは群衆に対して問うています。

ここで、注意したいことは、「風にそよぐ葦」の「そよぐ」という言葉です。この「そよぐ」という言葉は、漢字で書くならば、「戦ぐ」と書きます。風に吹かれて草や木の葉などがかすかに音を立てて揺れ動く様子を表しますが、「風にそよぐ葦」という表現が意味することは、権力者の言うままになって、定見のない者の譬えなのです。

イエスはここで、群衆の中でヨハネから悔い改めの洗礼を受けられた人たちに対して、悔い改めたことによって逆にあなた方は権力者の言うがままになってはいないか、と問うているのです。悔い改めたことで、神にふさわしい人間となって、祝福を受けるようになったとでもいうのか、とイエスは批判的に言っているのです。ですから、8と9節で「では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である」と言うのです。イエスは、風にそよぐ葦ではないかと問うことによって、ヨハネと同じく群衆に対しても、時の権力者と同じように、罪ある人間が神の祝福を受けられるはずはないという当時のユダヤ教の時代精神と同じ枠組みの中にあなたがたもいるのではないかと問うたのです。

先週申し上げたように、イエスがこの世に来られた最大の目的は、律法を守ることによって、神の祝福の中に入れるという因果応報の神認識ではないのです。<sup>2</sup> そうではなく手、イエスは当時オウダヤ教の枠組みによって、神の恵みから除外されていた罪人や障碍を持っている人たちがイエスを通して癒されるという事実が示していることに注目するならば、神は罪あるがゆえに、その罪を赦して神に向き合う人間存在にしてくれるということを移籍の業を通して明らかにしてくださいなのです。

私たちは主イエスの到来によって、罪赦された者として、この世の歩みを為していくことが認められている神の民なのです。もちろん、自らの罪を自覚して悔い改めた方が良いでしょう。けれども、大切なことは、悔い改めが神の祝福の条件ではないということなのです。主イエスが私たちすべての罪を背負って十字架についてくださったことで、私たちは赦された者として神の御前に立っているのです。この許された者として神の許で生かされる定めにあるのです。ですから、11節で、「はつきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である」と言っているのは、神の国においては罪赦されて生きる者とされた最も小さな者でも、洗礼者ヨハネよりも偉大である、ということです。神の国では、悔い改めた者が最も小さな者ではなくて、既に罪赦されて神に向き合う者とされている最も小さな者が尊ばれるべきなのです。19節でイエスが大食漢で大酒飲みだと言われるのは、イエスのこの世における姿が立派な聖人君主のような者でなくても、罪赦された人間のよう、そのままの姿で、神によって罪赦された者となっていることを象徴的に強調した表現なのです。